

17. 中藻生活50余年

谷口銀松

※明治40年1月25日生、大正9年11月、村滝農場に入植。

△村滝農場の地域は、砂金掘りが見つけたという話だが……。

○それは、上興部に居た山下友次郎（十吉の父）さんが、砂金掘りに中藻地区に入り、密林であったが、農耕地に適しているので、同じ上興部に居住していた村井丑之丞に、このことを話して、取得するように勧めた。

村井は、下川の日比さん、石丸さんが大金持ちだったので、この人たちと共同で売払いを受け、山下さんにそのお礼に、一番良い地域をやると約束したが、売払いになって入地するようになってから、やると言う土地は、戦後山下さん等が樺太から引揚げて、入殖した興部村界近くの一番不便な土地だったので、山下さんは怒って、これを断ったそうだ。

しかし、それから40年ほどして、昔自分の土地になろうとしたこの土地に、戦後開拓者として入地したのも、何かの因縁だろうと、しみじみ述懐していた。

△村滝農場は、昭和10年刊行の村誌に、面積が500町近くあったと書いてあるが、そんなになかったのではないか。

○いや、初めはそのくらいあったのだ。地域は、峠下上薬零号境から興部村界まで、フトロの沢も含まれていた。下流の方は、長谷川、山本政春や、その川向いの桜田、村岡の土地や、興部の米田の土地もそうだった。

江川、近藤、菊地さんの向いの、いま村有林になっているフトロ付きの土地も農場の区域だった。ただ鶴さんの入地したところは、除かれて居た。

△村滝農場が、カモ井農場に変わり、昭和14年に農場開放になったが、その時より前に、フトロ沢、学校附近が、個人払下げになった理由は？、そして盗伐騒ぎがあったようだが……。

○大正12年ころ、農場がどれ丈け開墾されたかと言う成功検査があり、検定の結果は、上藻の境から、三渡世橋の間が主としてパスして、下流の方は、一部を除いて不成功になり、引揚げとなって終わった。

地主は何故か、この引揚げになったことを知らされず、当時小作で入っていた私たちは、そのまま開拓を続けて木を伐ったことが、盗伐だと大騒ぎになり、結局金を納めることに落ち着き、私のところも当時の金で、170円を納入したが、その金を捻出するために、冬の馬糧にするためのエン麦を売ったり、越冬用の薪まで売って漸く納入したが、本当に酷い目にあった。

そういうことで、私たちのところは不成功で、国に引揚げられて、農場とは関係なくなったことが判ったので、改めて個人払下げの手続きをとり、個人所有地となったのだ。

こんなことが原因してか、村滝農場は、カモ井農場（代表今井俊蔵）に売払いとなり、昭和14年に民有未墾地として、農場全地を開放したが、その時は、180町ほどに減っていたのだ。

この開放のときに、兄直松の所からフトロに越す丘の上に、小長谷増次郎という台湾巡査上がりの社会主義者が居て、盛んに小作開放を唱えていた。この時の農地買受けの

組合長は、大沢時之丞さんで、副は小林作恵知さんだった。

△申藻は、ハッカ、澱粉が盛んなようだったが？。

○私が中藻に入ったとき、澱粉工場の跡が残っていた。（宮田虎蔵経営）大正5年ころに始めて、7年ころに倒産したという話だ。この工場は規模が大きく、晒し桶が16個程あり、馬鈴薯を運搬するトロッコの木のレールが残っていた。木製の水車が動力だった。

私は中藻で澱粉工場をやろうとして、一滑の武田さん附近の古い工場（江戸嘉助経営か？）を見に行き、水車の設計割出しを研究して、自分で作り上げ、澱粉製造方法も3年ほど、下川の工場で働き習得した。

このようにして始めた工場は、昭和7年ころからであって、昭和39年に上渚滑の合理化工場が出来て、村内の澱粉工場が全部閉鎖するまでの33年間、継続して操業したが、村内では一番長期間操業したと思う。

澱粉の組合ができたのは、柳田村長時代（昭和8年～11年）で、温根別の秋山幸太郎の工場を視察して、それから組合が作られたと思う。齊藤健二郎さんが、全道の組合の副組合長になったりして、西興部澱粉の隆盛を極めた時代があった。

ハッカは、私が入地したころは沢山作付けされていて、一休みというところだったが、取卸油を絞っている所はなかった。中藻ハッカ作付の最初の人と言われた義達高蔵さんは、中藻と瀬戸牛市街を往復していて、ハッカの作付も一段落というところだった。後に、兄直松附近にハッカ釜が作られて、随分長い間使用された。

このほか農作物では、センキュウ、トウキなども作られ、下川の黒木という商人が仲買いをしていた。

△中藻小学校前の記念碑のいわれは？

○昭和14年に、農場が開放になり、管理人の今井俊蔵が、学校に奉安殿を寄附して呉れたので、部落で農場開放と、奉安殿建設を記念して建てたものだ。碑文と文字は、千葉照平先生が書かれたものだ。